The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	回顧と展望
Author(s)	片山, 行雄
Citation	デザイン理論. 1981, 20, p. 4-5
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52607
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

回顧と展望

片山　行雄

学会の創立に際して幾度か発起人会が開かれた。愈具体化の段階で，最初の役員をどうするかという事になり，井島さんから「今日来ている人達は有無をいわさず役員になって貰おうやないか」と提案があり，異議なし決定した。爾来23年の歳月を経て，私は学会と共に齢を重ねた。会長を誰にしょうかという事になったので，「有無をいわさず井島さんにお願いしょう」という私の発言の通り決ったが，当時委員長として活躍された重成基さんと共に今は亡い。

創立総会には 200名近くの参加者があり，懇親会も今では想像も出来ない位盛大で，関西初のこの学会の発展を願う会員の意識の高さがくみ取れた。

創立総会の折，デザイン学会とすべく提案したが，霜鳥さんがカタカナはいやだというので其様に決った。「関西」の名はとれたが，今尚英語名に困っている。一層のこと東京と合同して日本デザイン学会支部という事にしてはどうか。いつまでも狭い地域に局髄しては発展が望めない。広い視野をもつべきである。

デザインは流動する現実の中での実践活動であり，その行為の評価は最高類型の基準がなく，デザイン学は前提がゆれ動く。常に変貌する歴史的社会的経済的現実を基磐とするからだ。われわれはもっと実践活動の側からの発表を望み度い，論理構造に弱いからと言って，現実を離れて論理はない。論理は現

実の中にこそ認められるべきであり，パネルの発表も結構だが，それは厳しい討論の場であり度いものである。実践活動の側からの主題で，企業の参加を求めてシンポジュームをやり，学会への協力を求める事も可能ではないか。

デザインは今日的であると同時に，特に巨大プロジエクトに於ては未来予側がなければ成り立たぬ仕事である。学会自体も広い視野と展望をもつべきで，若い研究者の活躍を期待するものである。

編輯の側の要望に添えぬ文章になったかもしれぬが，回顧録では無意味と思い蛇足，加えた点，御海容を願い度い。